

## 高校体育実技に関する意識調査

五十嵐 幸 一

### I. 緒言

スポーツ白書(2020)によると国民の体力低下、とくに子どもの体力低下が指摘されている。また、活発に運動する者とそうでない者との二極化も課題とされている。これはここ最近の事ではなく、30年以上前から指摘されていたことであり、文部科学省をはじめ各関係機関も様々な取り組みを行っている。「スポーツ基本計画」(2017)では成人のスポーツ実施率を週1回以上65%程度、週3回以上が30%程度を達成することが数値目標として掲げられているが目標には到達していないのが現状である。

体力向上には運動が不可欠ではあるが、小学校から始まる学校体育の授業は生涯における運動習慣の獲得やスポーツ技術や文化の学習に大きな影響力を及ぼしており、様々な実技授業の研究が進められている。特に日本では高等公教育機関の進学率が82.6%(文部科学省2019)と高い水準にあることから、高校の体育実技授業は生涯にわたる運動習慣の構築に影響があると考えられる。

高等学校学習指導要領(平成21年告示)によれば、保健体育科目の目標は「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力の育成」と明示されている。各高校ではこの指針に基づいて授業が行われているが、生徒に生涯にわたるスポーツライフを実現させるためには様々な工夫や留意点が必要であろう。青木ら(2009)は体育授業の構成要因を検討し、中学生と高校生による校種の違いと性差があることを明らかにしている。また藤谷ら(2004)は高等学校における「よい体育授業」の構成要因として、教師は「楽しさ」「成果」「協力」、生徒は「楽しさ」をあげ、両者に差違が生じていることを報告している。高校に限ったことではないが、体育はスポーツ種目を教材として用いるため「できる」「できない」が他の生徒にはっきり分かってしまう科目でもあり、それが運動の「好き」「嫌い」につながってしまうことも考えられる。

一方、大学への進学率も53.7%(文部科学省2019)と高校生の半数以上が進学する現状において、成人のスポーツ実施率に大学体育が与える影響は少なくない。小林ら(2016)は大学卒業生を対象に調査した結果、体育科目の身体活動、男女共修、他学部との交流に楽しさを感じたと報告している。天田・青木(2010)は大学体育科目の有効性としてスポーツ活動を通じた友人作りをあげている。石田ら(2002)大学体育に学生が期待するものは体力健康づくりだとしている。これらのことから大学体育においては「できる」「できない」という技術的な問題よりも楽しさや仲間づくり・健康体力づくりが求められていると考えられる。しかし、大学体育に求められている楽しさや仲間づくりは、一緒にスポーツを行うということが前提であり、仲間と楽しんでスポーツが行える

一定の運動技術や共通のスポーツのルールを理解が必要である。掛水ら(2016)は高校の体育実技の種目実施率は球技から武道まで大きな開きがあると報告している。これには高校の種目選択制が影響していると思われるが、高校体育実技の授業内容や生徒がどのような態度で授業を受けていたのかを把握し、大学体育に活かしていくことは生涯にわたるスポーツライフを継続させていく上でも有効な資料になると思われる。

本研究は高校の体育実技授業を受けた生徒側からの価値や態度に関するアンケートを行い高校体育実技の構成要因ならびに性差を明らかにすることによって、大学で行う体育授業はどうあるべきかを検討するための基礎資料とすることである。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象者

調査は本学の2019年度健康・スポーツ1（1年次必修）の履修生230名を対象とした。そのうち調査内容に不備のない221名（男子学生78名、女子学生143名）を分析対象とした。

### 2. 調査方法

健康・スポーツ1の授業の第1回目に行われる各クラスのガイダンスにて無記名自記式質問紙調査を実施した。本研究内容を説明したのち質問紙を配付し、学生に回答させ、その場で回収した。なお、説明時には回答した内容の秘密性は保持されること、研究参加の任意性について説明し、質問紙内にも説明文を記載した。

#### 1) 調査項目

##### (1) 属性

学部、学科、性別を回答させた。

##### (2) 高校体育実技に関する設問

高校体育実技の実態を分析するため、先行研究(高田ら2000、藤田ら2004、天田・青木2010)を参考に生活向上、授業態度、授業環境、授業内容、実技中、教授方法、授業の結果の内容を含む36項目を設定した(表1)。設問項目に対して体育実技の授業で実際に教わったこと、行ったことや感じたことを想起させ、「よくあてはまる」4点、「だいたいあてはまる」3点、「あまりあてはまらない」2点、「あてはまらない」1点の4件法にて回答を求めた。

#### 2) 調査期間

2019年4月9日～12日

### 3. 分析方法

匿名化された36項目のデータについて、各項目の男女別の平均値・SDを算出した。また、構成要因を分析するために因子分析により因子を抽出した。Promax回転により抽出した因子の解釈、命名を行った。次に下位尺度に相当する項目から、相関関係を明らかにした。また下位尺度得点から男女の相違、相関関係について分析を行った。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 設問項目における男女差

表1に質問紙で得られた36項目のデータの男女別の平均値・SDおよび $t$ 検定の結果を示した。設問項目は生涯スポーツにつながるという観点から実技の授業に直接かわる設問に加え、授業に取り組む態度や実技を通して得られた結果などの内容を含む7つの分類を設定した。分類の内訳は「生活向上」として3項目、「授業態度」として7項目、「授業環境」として7項目、「授業内容」として3項目、「授業中」として3項目、「教授方法」として6項目、「結果」として7項目であった。

これらの項目について得られた得点から男女間の有意差を検討した。統計的な差がみられたのは生活向上の「生涯にわたってスポーツを継続する力がついた」( $t(219)=3.50, p<.01$ )「普段の生活が豊かになった」( $t(219)=2.96, p<.01$ )の2項目、授業態度の「体育実技の時間が待ち遠しかった」( $t(219)=2.37, p<.05$ )、「実技の内容よりクラスの仲間と交流を深める方が重要だった」( $t(219)=2.47, p<.05$ )の2項目、実技中の「体育実技の時間はいつも苦痛だった」( $t(219)=-2.33, p<.05$ )の1項目、教授方法の「実生活に役立つような運動の仕方を教わった」( $t(219)=2.83, p<.01$ )の1項目、「結果」の「スポーツは楽しいという事が実感できた」( $t(219)=2.85, p<.01$ )、「十分に運動することができた」( $t(219)=2.33, p<.05$ )、「以前より速く走ることができるようになった」( $t(219)=3.63, p<.001$ )、「体育実技の授業でスポーツが好きになった」( $t(219)=2.26, p<.05$ )、「なぜ自分がその評価なのか納得感があった」( $t(219)=2.28, p<.05$ )の5項目であった。

#### 2. 体育実技構成要因の分析

質問紙で得られた36項目のデータについて探索的因子分析による因子抽出を行った。それぞれの項目について平均値、標準偏差を算出した(表1)ところ、天井効果およびフロア効果のみられた項目(9項目)があったため以降の分析から除外した。

次に残りの27項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化(8.95、2.03、1.71、1.28、1.18、1.11…)と因子の解釈可能性を考慮すると、3因子構造が適当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果十分な因子負荷量を示さなかった4項目を分析から除外し、再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表2に示す。なお、回転前の3因子で23項目の全分散を説明する割合は49.57%であった。

第1因子は、「先生は熱心に教えてくれた」「体育実技の授業は手を抜いても許されるという雰囲気があった(逆転項目)」「スポーツ種目のルールについて詳しく教わった」「実生活で役立つような運動の仕方を教わった」など10項目で構成されており、「熱心」や「手抜き(逆転項目)」、「詳しく」、「役立つ」という取り組み方に前向きな内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「積極性」因子と命名した。

第2因子は「体育実技は他の教科の息抜きの時間だと思っていた」「普段の生活が豊かになった」「ゲームは対戦相手に合わせて力をセーブしていた」など8項目で構成されており、「息抜き」や

「豊か」「セーブ」など気持ちの余裕をあらわすような内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「ゆとり・余裕」因子と命名した。

第3因子は5項目で構成されており、「実技の上手い下手が他の人に分かってしまうのでいやだった」「球技のゲームなどはどう動いていいのか分からなかった」など運動技能に関係する内容の項目がいずれも高い負の負荷量を示していた。そこで「出来映え」因子と命名した。

表1 設問項目の分類と男女別の平均値とSDおよびt検定の結果

分類	項目	全体 (n=221)		男子学生 (n=78)		女子学生 (n=143)		t値(男女比較)
		平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
生活向上	1. 生涯にわたってスポーツを継続する力がついた	2.73	.91	3.01	.95	2.57	.86	3.50**
	3. 普段の生活が豊かになった	2.77	.90	3.01	.95	2.64	.85	2.96**
	9. 仲間と協力することの大切さが実感できた	3.46	.68	3.56	.68	3.41	.67	1.67
授業態度	17. 体育実技は他の教科の息抜きの時間だと思っていた	2.74	1.02	2.90	1.04	2.65	1.01	1.72
	21. 体育実技の時間が待ち遠しかった	2.81	1.01	3.03	.98	2.69	1.01	2.37*
	22. 成績にかかわるので積極的に振る舞っていた	2.76	.86	2.81	.91	2.74	.83	.55
	23. 試合などでは本気を出して勝利を目指していた	3.14	.81	3.27	.82	3.06	.81	1.81
	24. ゲームは対戦相手に合わせて力をセーブしていた	2.25	.92	2.40	.96	2.17	.89	1.73
	30. 実技の内容よりクラスの仲間と交流を深めるほうが重要だった	2.72	.80	2.90	.82	2.62	.78	2.47*
授業環境	35. 体育実技授業でのスポーツの上達は期待していない	2.11	.87	2.08	.89	2.13	.86	-.46
	6. 体育実技授業は安全に十分な配慮がされていた	3.14	.62	3.47	.55	3.37	.66	1.18
	13. 着替えるのが面倒だった	2.41	1.00	2.45	1.00	2.39	1.01	.40
	15. 体育実技の授業は手を抜いても許されるという雰囲気があった	1.89	.80	1.95	.74	1.85	.83	.85
	20. 用具ボールやラケットなどの不足や破損はなかった	2.95	.93	2.82	.99	3.01	.89	-1.49
	31. 実技の上手い下手が他の人に分かってしまうのでいやだった	2.27	.96	2.14	.89	2.34	.99	-1.44
授業内容	33. 今まで経験していないスポーツ種目が多かった	2.24	.93	2.45	.91	2.40	.94	.38
	34. 他の人の使った用具を扱うのはいやだった	1.56	.74	1.55	.70	1.57	.77	-.15
	11. 球技ではゲームの時間が多かった	3.52	.67	3.56	.68	3.50	.67	.64
実技中	14. スポーツ種目のルールについて詳しく教わった	2.85	.82	2.95	.88	2.79	.78	1.38
	26. 実技の基礎練習パス素振りシュートなどをする十分な時間があつた	3.08	.82	3.01	.90	3.12	.77	-.92
教授方法	16. 体育実技の時間はいつも苦痛だった	1.71	.84	1.54	.75	1.81	.87	-2.33*
	28. 体育実技の授業時間は短いと感じた	3.10	.96	3.26	.93	3.01	.96	1.86
	36. もっと専門的に教わりたかった	2.18	.89	2.28	.94	2.12	.86	1.31
結果	4. 合理的計画的に授業が進められていた	3.04	.80	3.05	.88	3.03	.75	.14
	7. 実生活に役立つような運動の仕方を教わった	2.70	.87	2.92	.89	2.58	.84	2.83**
	18. 強制的にやらされていた	1.57	.78	1.53	.77	1.59	.78	-.57
	19. 先生は熱心に教えてくれた	2.95	.83	2.95	.77	2.96	.86	-.08
	27. 体育実技の授業でできなかった動きができるようになった	2.86	.83	2.95	.87	2.81	.80	1.18
	32. 球技のゲーム等はどう動いていいのか分からなかった	2.17	.90	2.15	.94	2.17	.87	-.17
結果	2. 体力がついた	2.99	.84	3.12	.91	2.92	.80	1.68
	5. 健康を保持増進できるようになった	3.04	.74	3.17	.75	2.97	.73	1.95
	8. スポーツは楽しいという事が実感できた	3.35	.83	3.56	.77	3.24	.84	2.85**
	10. 十分に運動することができた	3.35	.78	3.51	.72	3.26	.80	2.33*
	12. 以前より速く走ることができるようになった	2.52	1.00	2.85	.94	2.35	.99	3.63***
	25. 体育実技の授業でスポーツが好きになった	2.88	.98	3.08	1.00	2.77	.95	2.26*
	29. なぜ自分がその評価なのか納得感があつた	3.06	.81	3.23	.80	2.97	.80	2.28*

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$

表2 高校体育授業評価リストの因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

項目内容	I	II	III
19. 先生は熱心に教えてくれた	<b>.82</b>	-.34	.10
15. 体育実技の授業は手を抜いても許されるという雰囲気があった	<b>-.74</b>	.53	-.14
14. スポーツ種目のルールについて詳しく教わった	<b>.67</b>	.02	-.12
7. 実生活に役立つような運動の仕方を教わった	<b>.65</b>	.20	-.16
4. 合理的計画的に授業が進められていた	<b>.54</b>	.12	.09
5. 健康を保持増進できるようになった	<b>.51</b>	.47	-.15
2. 体力がついた	<b>.48</b>	.32	.10
26. 実技の基礎練習パス素振りシュートなどをする十分な時間があつた	<b>.40</b>	.08	-.01
29. なぜ自分がその評価なのか納得感があつた	<b>.38</b>	.15	-.03
12. 以前より速く走ることができるようになった	<b>.34</b>	.32	.05
17. 体育実技は他の教科の息抜きの時間だと思っていた	-.27	<b>.68</b>	-.03
3. 普段の生活が豊かになった	.29	<b>.64</b>	-.01
24. ゲームは対戦相手に合わせて力をセーブしていた	-.04	<b>.60</b>	-.14
21. 体育実技の時間が待ち遠しかった	.02	<b>.49</b>	.38
1. 生涯にわたってスポーツを継続する力がついた	.42	<b>.47</b>	.05
25. 体育実技の授業でスポーツが好きになった	.19	<b>.46</b>	.38
36. もっと専門的に教わりたかつた	-.10	<b>.44</b>	.01
30. 実技の内容よりクラスの仲間と交流を深めるほうが重要だつた	.15	<b>.37</b>	-.22
31. 実技の上手い下手が他の人に分かってしまうのでいやだつた	.22	-.12	<b>-.76</b>
32. 球技のゲーム等はどう動いていいのかわからなかつた	.16	-.09	<b>-.69</b>
35. 体育実技授業でのスポーツの上達は期待していない	-.30	.17	<b>-.54</b>
13. 着替えるのが面倒だつた	-.10	.16	<b>-.47</b>
33. 今まで経験していないスポーツ種目が多かつた	-.10	.27	<b>-.47</b>
因子間相関			
I	—	.59	.59
II		—	.55
III			—

### 3. 下位尺度間の関連

体育実技構成要因として抽出された「積極性」、「ゆとり・余裕」、「出来映え」の3つの尺度について平均値を算出した。「積極性」下位尺度得点（平均 2.93, *SD* .54）、「ゆとり・余裕」下位尺度得点（平均 2.63, *SD* .62）、「出来映え」下位尺度得点（平均 2.72, *SD* .62）であった。内的整合性を検討するために各下位尺度得点の $\alpha$ 係数を算出したところ、「積極性」で $\alpha = .85$ 、「ゆとり・余裕」で $\alpha = .82$ 、と十分な値が得られた。「出来映え」は $\alpha = .69$ とやや低い値になったが、0.7に近い値であったので、項目を削除せずにそのまま分析することとした。

体育実技構成要因の下位尺度相関を表3に示す。3つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した。

### 4. 下位尺度における男女差の検討

男女差の検討を行うために体育実技構成要因の下位尺度得点について *t* 検定を行った。その結果、積極性下位尺度 ( $t(219)=1.93, ns$ )、出来映え下位尺度 ( $t(219)= .38, ns$ ) には有意差が見ら

れなかったが、ゆとり・余裕下位尺度 ( $t(219)=3.46, p<.01$ ) は男子学生の方が有意に高い得点を示していた（表4）。

## 5. 下位尺度における男女別の相関

男女別の体育実技構成要因下位尺度間の相関係数を表5に示す。女子学生は積極性とゆとり・余裕で .56 ( $p<.001$ )、積極性と出来映えで .51 ( $p<.001$ )、ゆとり・余裕と出来映え .54 ( $p<.001$ ) のいずれも有意な中程度の正の相関を示した。一方、男子学生は積極性とゆとり・余裕で .79 ( $p<.001$ ) という比較の高い相関を示したが、積極性と出来映えでは .36 ( $p<.01$ )、ゆとり・余裕と出来映えでは .24 ( $p<.05$ ) と関係性が低い傾向を示した。

表3 高校体育授業評価リストの下位尺度相関と平均、SD、 $\alpha$ 係数

	積極性	ゆとり・余裕	出来映え	平均	SD	$\alpha$
積極性	—	.65***	.46***	2.93	.54	.85
ゆとり・余裕		—	.43***	2.63	.62	.82
出来映え			—	2.72	.62	.69

\*\*\*  $p<.001$

表4 男女別の平均値とSDおよびt検定の結果

	男子学生 ( $n=78$ )		女子学生 ( $n=143$ )		t 値
	平均	SD	平均	SD	
積極性	3.03	.56	2.88	.53	1.93 ns
ゆとり・余裕	2.83	.63	2.53	.59	3.46**
出来映え	2.75	.61	2.71	.63	.38 ns

\*\*  $p<.01$

表5 男女別の相関係数

	積極性	ゆとり・余裕	出来映え
積極性	—	.79***	.36**
ゆとり・余裕	.56***	—	.24*
出来映え	.51***	.54***	—

\*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$ , \*\*\*  $p<.001$

右上：男子学生 左下：女子学生



#### IV. 考察

本研究で用いた質問紙は体育実技の場面だけでなく、履修した実技の授業がその人の生活や生涯スポーツにつながるのかについても質問している。それぞれの分類を中心に男女差に着目して考察を加える。

平均値で男女間の有意な違いがみられなかったのが、分類でいうと授業環境、授業内容であった。授業環境の中でも最も重要視すべき安全や用具の破損については、男女とも平均値が比較的高く、良好な状態であったと思われる。また、体育実技特有の着替えや用具の共有についても男女差はなかったが、平均値から着替えは多少面倒に感じていることがみてとれた。用具の共有については平均値が比較的低いことから他の人が使ったものを使うことについて、男女ともそれほどいやだとは思っていないことが考えられる。また、授業の雰囲気については「体育実技の授業は手を抜いても許される雰囲気があった」という設問に対して平均値は比較的低い値を示したことから、あそびという感覚ではなく真剣に授業に取り組んでいたと思われる。授業内容についてはどの項目も比較的高い平均値を示しており、有意差はみられなかった。

授業内容については有意な男女差はみられなかったものの、実技中の「体育実技の時間はいつも苦痛だった」の項目については女子学生の方が高値を示し、有意な差がみられた。授業環境における「実技の上手い下手が他の人に分かってしまうのでいやだった」については男女の有意差がみられなかったことと考え合わせると、女子学生の苦痛の原因は技能の得手不得手以外のところにも存在することが推察される。苦痛の原因を考えるために他に男女差がみられた項目を取り上げてみると、授業態度の「実技の内容よりクラスの仲間との交流を深めることが重要だった」の項目で有意に女子学生が低い値を示した。佐々木ら(2010)は体育授業において女子より男子の方が運動能力の劣等感が誹謗中傷経験の有無につながりやすいことを指摘していることから、女子学生は他人とのかかわり（例えば球技でのチーム編成など）に関して苦痛を感じている可能性があるだろう。

教授方法で男女差がみられたのは「実生活に役立つような運動の仕方を教わった」であり、女子学生が有意に低い値を示していた。しかし、他の項目については男女の有意な差はみられなかったことから、教員側からすると授業の進め方や教授方法に関して男女の違いをそれほど意識する必要はないと思われる。有意差があった項目は、体育実技を生活に活かすこと、ひいては生涯スポーツにつなげる意識があるかどうかを問うたものであり、同じ授業を行っていても男子学生は普段の生活の中で運動を行う可能性があるが、女子学生は授業中という限られた時間だけの運動に終始する可能性があるという解釈ができよう。これと同じような傾向は生活向上にもみられた。「生涯にわたってスポーツを継続する力がついた」「普段の生活が豊かになった」の項目で有意に女子学生が低い値を示した。これらの項目も生涯スポーツにつなげる意識を問うたものであることから、男子学生に比べて女子学生は運動の継続性に関してはあまり期待できないことを示唆していると思われる。

また、結果の「スポーツは楽しいという事が実感できた」「体育実技の授業でスポーツが好き

になった」の項目について有意に女子学生が低い値を示した。須藤ら(2015)によると、女子学生は運動が好きと回答する者の割合は男子学生にくらべて低値であることを報告している。これらのことにより実技の指導での結果というより、運動そのものの好き嫌いについての男女差が影響しているのではないかと考えられる。授業態度の「体育実技の時間が待ち遠しかった」に女子学生が低い値を示していることも運動に関する男女差が影響しているものと思われる。

一方、「十分に運動することができた」についても女子学生は有意に低い値を示し、「以前より速く走ることができるようになった」についても女子学生は有意に低い値を示していることから考え合わせると、現在行われている体育実技の授業は女子学生にとっては十分に満足のいくものではないということが考えられる。このことは「なぜ自分がその評価なのか納得感があつた」について女子学生は有意に低い値を示していることから推察される。学校体育として生涯スポーツへの移行を考えるのであれば、女子学生にとって満足感の得られる高校体育実技授業の工夫が必要であろう。

本研究では高校体育実技授業に対する構成要因について因子分析を用いて検討した。探索的因子分析で行ったため因子負荷量は0.4よりやや低い値も用いて解釈することとした。結果として第1因子「積極性」、第2因子「ゆとり・余裕」、第3因子「出来映え」の3つの因子が抽出された。これらの因子を構成要因とし、男女別で有意差を検討したところ、積極性と出来映えには有意差は認められなかったものの、ゆとり・余裕に関しては男子学生が有意に高い値を示した。島本(2009)は体育授業において運動部学生の「挑戦達成」によるライフスキル獲得レベルが低いことを報告しているが、本研究の結果から推察すると男子学生は体育授業を良い成績を残すための挑戦や達成感を得るといった目的意識が女子学生より低く、体育授業は「息抜き」として捉えられているとも考えられる。また、ゆとり・余裕においては「普段の生活が豊かになった」にも比較的高い負荷量を示していることから男子学生は体育実技授業を単なる成績評価の対象というより自分を高める教養として捉えていると考えられる。

これら因子の男女差は相関係数にもみてとれる。男子学生は積極性とゆとり・余裕に高い相関関係(.79)がみられ、積極性と出来映え(.36)、ゆとりと出来映え(.24)はやや低い相関関係を示した。男子学生は女子学生に比べて体育の授業で求められる出来映えの意識が少なく、ゆとり・余裕を持って授業に積極的に臨んでいることが伺える。女子学生はそれぞれの因子が互いに中程度の相関で影響し合っていることから、出来映えが良くなければ積極性やゆとりも生じてこないことも推察される。

本研究の知見から高校体育実技授業において男子学生に比べて女子学生は生涯にわたる運動やスポーツの継続性の意識が低いことが示唆された。この遠因として考えられるのが体育やスポーツの場面での出来映えである。体育実技の場面ではできる・できないが具現化してしまい、他者の目にさらされることが多い。できる者は積極的に取り組むが、できない者や、やってみたいが人目にさらされるのが恥ずかしいという意識を持つ者は二の足を踏んでしまい、結果的に運動経験の不足から、できないまま体育の時間をやり過ごしてしまうことが多いことが考えられる。本研究からは女子学生にその傾向が強いことが示唆された。

高校体育実技授業の実態を踏まえて、学生の生涯にわたるスポーツライフを実現させるために



は、大学体育授業として教材として用いる運動を吟味する必要がある。できる・できないという出来映えの部分なるべく廃し、技能レベルが低い者でもスポーツ行ったり、またやってみたくてという充実感が得られるようなスポーツ種目の選択やゲーム、ルール工夫などが重要になると思われる。

## V. 結語

大学体育授業改善のための基礎資料を得る目的で高校体育実技授業に関する構成要因及び性差を検討した結果は以下のとおりである。

1. 男子学生に比べて女子学生は運動やスポーツの継続意識は低値であった。
2. 体育授業の構成要因としては「積極性」「ゆとり・余裕」「出来映え」が抽出され、「ゆとり・余裕」の平均値は女子学生の方が低値であった。
3. 構成要因の相関関係より「出来映え」が女子学生の運動行動に影響することが示唆されたことから、生涯スポーツへの移行のためには大学体育授業に用いる教材の工夫が望まれる。

## 文献

- 青木宏樹, 出村慎一, 北林保, 藤谷かおる, 岩田英樹, 内山応信, 宗倉啓, 山下秋二 生徒が判断する体育授業構成要因の検討 日本教育学会誌 第32巻第2号 11-20 2009年
- 天田秀彦・青木敦英 大学体育実技の履修に関する実態調査—スポーツ科学演習の受講状況から— 流通科学大学論集—人間・社会・自然編—第23巻1号 87-95 2010年
- 石田博也, 星島葉子, 矢野博己, 米谷正造, 木村一彦 大学体育実技の今後のあり方に関して—K大学健康体育実技履修選択の動向からの考察— 川崎医療福祉学会誌 Vol.12 No.2 311-319 2002年
- 掛水通子, 戸田芳雄, 中村平, 大石千歳, 鶴澤文子, 矢尾泰浩, 小野田桂子, 及川佑介, 長谷川千里, 笹生心太 本学新入生の高校時代における保健体育授業や部活動の実態調査概要 女子体育研究所報 10 3-12 2016年
- 加藤優 『高田4原則』を実現する授業方策の一考察 都留文科大学研究紀要 第86集 1-19 2017年
- 小林勝法, 中山正剛, 北徹朗, 平志穂 大学卒業生の教養体育授業に対する感想のテキストマイニング分析 大学体育学 13 72-81 2016年
- 笹川スポーツ財団 スポーツ白書 2020 第2章、第4章 笹川スポーツ財団 2020年
- 佐々木万丈, 西田保, 伊藤豊彦, 磯貝浩久, 杉山佳生, 渋谷崇行 体育授業中の被中傷に対する認知行動的対処と体育授業への適応 日本女子体育大学紀要 第40巻 55-66 2010年
- 澤聡美 楽しい体育授業の満足度に影響する要因 人間発達科学部紀要 第11巻第3号 31-37 2017年
- 島本好平, 石井源信 体育授業におけるスポーツ経験がライフスキルの獲得に与える影響—運動部所属の有無からの検討— スポーツ心理学研究 第36巻第2号 127-136 2009年
- 須藤美智子, 萩由美子, 吉岡尚美, 田巻以津香, 吉原さちえ, 花岡美智子, 大塚真由美, 赤羽綾子, 中村なおみ, 川向妙子 大学生の体育授業に対するイメージの因子分析結果と運動の好き嫌いとの関連—女性における体育と生涯スポーツを考える— 大学体育学 12 33-41 2015年
- 高田俊也, 岡澤祥訓, 高橋健夫 態度測定による体育授業評価法の作成 スポーツ教育学研究 Vol.20, No.1 31-40 2000年
- 谷口るり子 授業評価アンケートを用いた授業の総合評価に影響する要因の分析 日本教育工学会論文誌 37(2) 145-152 2013年
- 東海林祐子, 永野智久, 加藤貴昭, 佐々木三男, 島本好平 大学体育授業がライフスキルの獲得に与える影響 単元前

の学生スキルレベルに着目して KEIO SFC JOURNAL Vol.12 No.2 89-108 2012年

中路恭平 大学体育実技の成果と学生の運動実施状況に関する研究 南山大学紀要「アカデミア」人文・自然科学  
編 第11号 69-90 2016年

藤谷かおる, 出村慎一, 北林保, 畑田雄也, 岩田英樹, 宗倉啓, 岡出美則 高等学校における「よい体育授業」の構成  
要因及びその評価項目内容の適切性: 教師と生徒間の比較 体育学研究 49 471-482 2004年

松田裕雄, 吉岡利貢, 河村レイ子, 桐生習作, 金谷麻里子, 武田丈太郎, 門野洋介 大学体育の価値向上に向けた一考察  
—教育実践における目標・教授・学習に着目して— 大学体育学 9 69-92 2012年

文部科学省 高等学校学習指導要領（平成21年告示） 2009年

文部科学省 報道発表令和元年度学校基本調査（速報値）の公表について 2019年8月8日

福ヶ迫善彦, スロト, 小松崎敏, 米村耕平, 高橋健夫 体育授業における「授業の勢い」に関する検討: 小学校体育授業  
における学習従事と形成的授業評価との関係を中心に 体育学研究 48 281-297 2003年

(いがらし こういち／体育学)